

素人相手に宇宙の謎に迫る

愛される

理由

ヒット作を
読み尽くす

長 安 浩

二〇〇三年五月に打ち上げられ、今年六月、地球から三億キロメートル離れた小惑星イトカワの粒子を持ち

ち帰った「はやぶさ」。肉眼では見えないその粒子を分析すれば、宇宙誕生の謎を解くこともできるかもしれないと報道され、周知のとおり、宇宙や科学技術への関心がいつきに高まった。

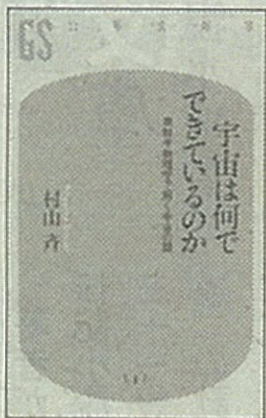
そんな中、絶好のタイミングで刊行された新書が、『宇宙は何でできているのか』である。著者は東京大学数物連携宇宙研究機構（IPMU）の初代機構長、村山斉。副題には「素粒子物理学で解く宇宙の謎」とあり、通常なら決して手を出さない代物ながら、「はやぶさ」の快挙にうかれた私はつい触手を伸ばしてしまった。

この本で村山は、大きく分けて二つのテーマについて言及していた。一つは、「物質（つまり宇宙）は何でできているのか」。もう一つ

は、その物質を支配する「基本法則はいかなるものか」。朝日カルチャーセンターでの講義が基になっているからか、門外漢の読者が少しでも理解を深められるよう村山はあれこれ比喩を駆使し、図表や写真も多用しつつ解説していた。

結果、前者のテーマについては、私もどうにかわかった（気がした）。すべての星を集めても宇宙全体の重さの〇・五%しかなく、「暗黒物質」なるものが二三%を占めるといった件は素直に驚いた。また、宇宙が加速しながら膨張し続けていると知り、何の実感もないくせに遠い未来を憂いたりした。しかし、後者のテーマになるとページをめくるたびに困惑が深まり、ハイゼンベルクが表した位置と速度に関する式のあたりでついに降参。その後は、文字面だけをながめて過ごしたのだった。

村山は悪くない。原因は、きっと私にある。あるいは、このようなコンパクトな本で、素人相手に宇宙の謎に迫ろうとした企画自体に無理があるのだろう。どちらにせよ、今、自分がいったいどこまで宇宙を理解できているか知りたいう方には、うってつけの一冊となっている。



幻冬舎新書 800円
20万部